渡名喜村歴史民俗資料館機能強化

基本計画

令和２年３月

渡名喜村

目次

はじめに. 1

第 1 章　基本的な考え方 2

1．計画の背景 2

（1）渡名喜村の歴史と概要. 2

（2）渡名喜村のまちづくり. 5

（3）村民説明会の実施. 7

2．資料館の基本的な考え方 9

（1）基本理念. 9

（2）基本方針. 10

第 2 章　展示計画 11

1．展示方針 11

2．展示の構成 11

（1）展示項目とテーマ. 11

（2）展示ストーリーとゾーニング. 13

3．展示手法 15

第 3 章　事業計画 17

1．事業方針 17

2．想定される利用者と事業内容 17

（1）村民. 17

（2）村出身者. 18

（3）来訪者. 18

3．歴史民俗資料館に関わる事業 18

（1）調査・研究事業. 18

（2）展示事業. 18

（3）教育普及事業. 18

（4）交流連携事業. 18

４．その他事業 19
（１）子育て支援事業 19
（２）社会福祉事業 19
第４章　運営計画 20
１．運営方針 20
２．運営体制 20
（１）運営主体 20
（２）配置スタッフ 20
（３）運営の課題 21
第５章　事業スケジュール 22
第６章　参考資料 23
１．視察記録一覧 23
２．国営沖縄記念公園　海洋文化館 24
（１）施設概要 24
３．世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム 29
（１）施設概要 29
（２）ヒアリング内容 29
４．久米島博物館 34
（１）施設概要 34
（２）ヒアリング内容 34

はじめに

渡名喜村では、新たな歴史民俗資料館の建設にあたり、平成 30 年 11 月に『歴史民俗資料館建設の基本的な考え方』、そして平成 31 年 3 月に『渡名喜村歴史民俗資料館基本構想』を策定しました。

『歴史民俗資料館の基本的な考え方』では、“歴史民俗資料館は、「現在と過去との対話」をする場所であり、過去を知り未来への展望をもたらしてくれる場所、また、私たちが自分自身の立っている足下を深く学び、誇りや愛着を抱き、アイデンティティを形成していくところとして、とても大切な場所である。”との認識の下に、以下の基本的な考え方と方針が示されています。

【歴史民俗資料館の基本的な考え方】

①渡名喜の歴史・民俗・自然について学ぶことができるようにする。
②歴史を知り、過去を知り、今と比べて未来への展望につながるようにする。
③多くの村民に親しまれ、訪れる人が何かを学習し発見出来る場所にする。
④渡名喜の歴史、沖縄の歴史、日本の歴史、東アジア・世界の歴史と考えが広がっていくようにする。
⑤渡名喜らしさが強調され、なおかつ、そこから沖縄や世界の様子が伺い知れるような内容にする。
⑥足下を深く掘り起こし、地域への愛着と誇りが醸成できるようにする。
⑦地域を知り、内外に渡名喜を紹介できる場所となるようにする。
⑧資料の収集・作成・整理・分析を行い過去の姿を正確に表現するようにする。

【歴史民俗資料館の方針】

①子供から高齢者まで活用でき、村民が交流出来る場所になるようにする。
②里帰りして気軽に立ち寄れる場所になるようにする。
③島を出て行く子供達に島への愛着や誇り、そして自信を抱かせるような内容にする。
④物の陳列に終始するのではなく、何度でも足を運びたくなるような内容になるよう工夫する。
⑤身近な歴史や習慣・由来・伝承など村民が知りたいこと、得たいことを提供できるようにする。
⑥高齢者及び村民が児童生徒・来訪者へ案内し説明するなど、高齢者及び村民の活躍する場を設け生きがいづくりにつながるようにする。
⑦包括的且つ個性が見えるようテーマを設定し展開していく。
⑧渡名喜の個性が見えるようなテーマを設定し展開していく。
⑨渡名喜の歴史・民俗等について理解が深まるよう、視覚的な展示及び体験をおこなうなど、五感を活用した内容にする。

また、『歴史民俗資料館基本構想』では、歴史・民俗・自然をはじめとする渡名喜の全体像が示されており、本基本計画では、基本的な考え方と基本構想に沿って新しい歴史民俗資料館の計画を進めていきます。

第1章　基本的な考え方

本章では、渡名喜村の歴史的背景や平成 24 年 3 月に公表された『第四次渡名喜村総合計画』と平成 28 年 2 月の『渡名喜村人口ビジョン及び総合戦略』に示されたまちづくりの方針、さらに村民を対象に実施したワークショップを通じて抽出した歴史民俗資料館に対する期待などをベースに、歴史民俗資料館整備の基本的な考え方を整理していきます。

1．計画の背景

（1）渡名喜村の歴史と概要

渡名喜村は那覇の北西海上 58km、北緯 26 度 22 分、東経 127 度 08 分の洋上に位置し、面積 3.87 平方ｋｍ、渡名喜島と入（出）砂島の二島からなります。渡名喜島は内面を東に向けた、やや三日月型の周囲 12.5Km の小さな島で、北部は緩やかな丘陵地帯、南部は石灰岩が露出した山岳地帯、南東部は絶壁をなして海に臨み、南北の丘陵地帯の間に集落をなしています。 入（出）砂島は渡名喜村の西方約 4Km の洋上にあり、低平でやや円形の無人島です。

渡名喜島（左）と入（出）砂島

渡名喜島は沖縄貝塚時代前期、今から３５００年ほど前に、人々が集落をつくり住んでいたことが 東貝塚（ひがしかいづか） の発掘で判明しています。そして、貝塚時代の後期、今から１７００年前から１２００年前ほどにかけて、アーカル 原（ばる） 一体に集落が出来始め、アンジェーラや 西（にし）の 底原（ぬすくばる） の平地に集落が形成されました。沖縄のグスク時代の１３世紀になると渡名喜にも 按司（あじ） が出現し、一族と祭政の安定を施すために、里にグスクを構えました。

琉球王朝時代になると渡名喜島は、首里王府の統治下になり、いつの頃からか渡名喜にも 地頭代（じとうでー） が配置され１８７９年の琉球処分まで続きました。渡名喜島は琉球と中国との貿易や進貢船の交通の要所にあるため、 烽火台（ひーたてぃやー） が設置され、久米島→渡名喜島→慶良間諸島→首里王府の通信ルートを担っていました。

明治１０年代頃から人口が増え始めたため、明治２０年頃に耕地拡大のため地頭代が住民の同意を得て、全山林を焼き払い、山頂に至るまで段々畑が開墾されました。それまで島は密林で覆われ、切り出した木々は火力の強い 渡名喜薪（とぅなちだむん） と

して名声を得ていました。そして、切り開いた畑には芋が栽培され、養豚が盛んになり、渡名喜豚として広く知られるようになりました。

フクギ並木

それでも渡名喜島は小さい上に耕地が少なく、農業だけでは生活が成り立たないので、那覇の壺屋で酒壺を購入し、奄美大島から先島まで出かけその酒壺を販売し、帰りに木材や芭蕉糸、タバコを購入し那覇で販売する交易を行なっていました。渡名喜の人が島々で販売していた酒壺のことを渡名喜瓶（となちびん）と呼んでいます。

明治 29 年 3 月に那覇・首里を除く沖縄県は 5 郡に編成され、渡名喜は島尻郡に編入されました。

そして、明治４１年の島嶼町村制（とうしょちょうそんせい）により、渡名喜島と入（出）砂島で渡名喜村となりました。

渡名喜島では、旧 6 月 25 日のカシキ・ウイミの日に綱曳きがおこなわれ、そのウイミを区切りとして、島の男たちは 10 月か 12 月頃まで久米島でのイカ漁にでていました。イカ漁がおこなわれるようになったのがいつ頃からかははっきりしませんが、明治 30 年代～40 年代にかけては、久米島でのイカ漁が定着していたようです。また、イカ漁の前には、沖縄本島の沿岸や時には奄美大島まで足をのばして、チョウセンサザエやタカセガイ、ヒロセガイなどの貝を採集したといわれています。当時、貝はボタンや工芸品の材料として利用されており、島の男たちが採集した貝は那覇で売られたといいます。

その後、明治 39 年には渡名喜島で近海鰹漁業がはじまり、大正中期に最盛期を迎え、村の基幹産業となり順調な発展をみせました。しかし、大正末期から昭和初期にかけて鰹節と豚の価格が大暴落し、村の経済は大きな打撃を受けたため、昭和初期には島の多くの男性が当時日本の信託統治領であったミクロネシアで鰹漁の漁夫として働き、収入を島に送金するようになりました。昭和 18 年頃から太平洋戦争の戦局悪化により渡名喜は現金収入の枯渇を余儀なくされ、昭和 20 年 3 月に始まった沖縄戦は 6 月に組織的な終戦を迎えました。

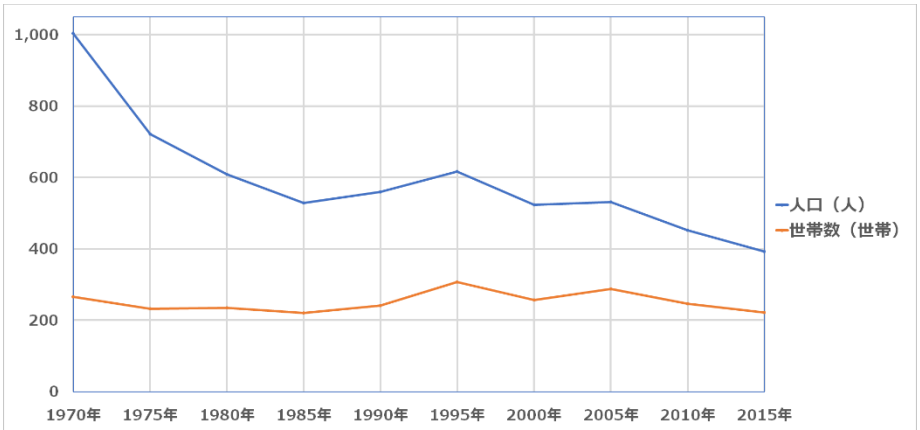
戦前のカツオ漁船

終戦後、渡名喜島には南洋諸島や沖縄本島からの引揚者が殺到し、人口は一時期 2,100 名に達しました。こうした豊富な労働力と援助物資を背景に、昭和 30

年頃に渡名喜島はかつお漁の漁村となりましたが、高度経済成長によって農漁村の全国的な過疎化が進行し、渡名喜村でも沖縄本島中南部への挙家離村が増加するなど過疎化が進行しました。人口は昭和 26 年の 1601 人から平成 28 年には 392 人と大きく減少するなど、過疎化と高齢化が現在の島の課題となっています。

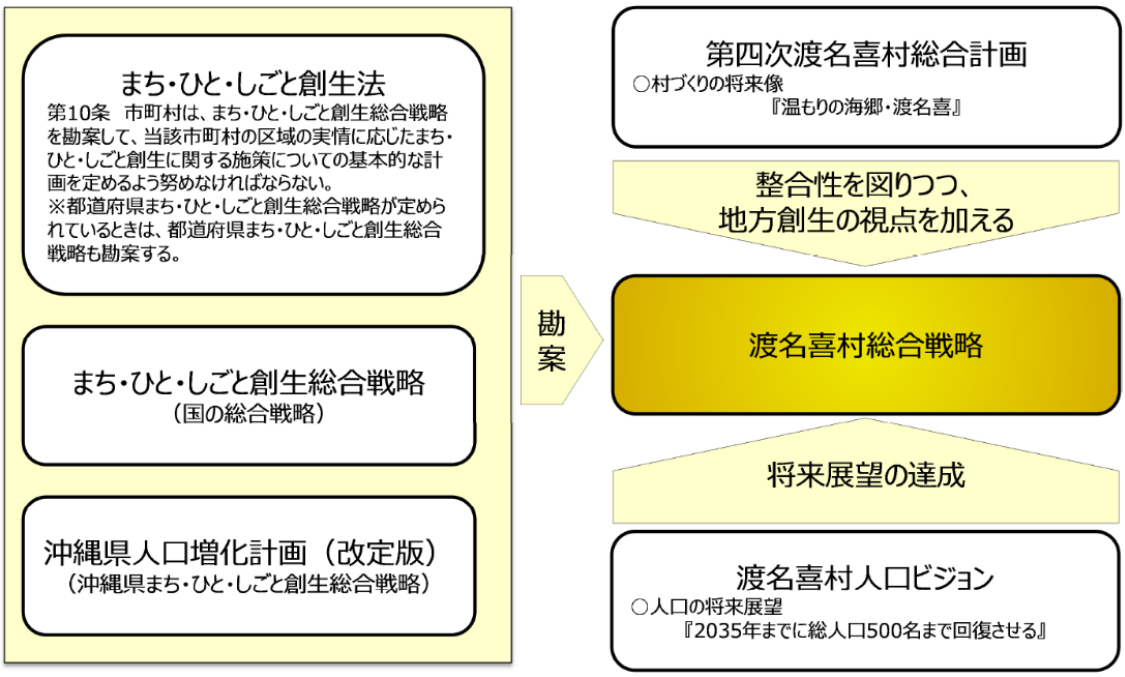
（2）渡名喜村のまちづくり

まちづくりにおいて基盤となる渡名喜村の人口は、ピーク時と比べて年々減少しています。1985 年以降回復基調でしたが、1995 年を境に再び減少傾向となっています。



渡名喜村の人口推移

渡名喜村では平成 24 年 3 月に、『第四次渡名喜村総合計画』を策定し、**『温もりの海郷・渡名喜』**という村の将来像を示しました。さらに、平成 28 年 2 月、**『2035 年までに総人口約 500 人まで回復させる』**とする人口の将来展望とともに、地方創生の視点を加えた新たなまちづくりの指針となる『渡名喜村総合戦略（以下、総合戦略）』において、**『渡名喜の自然・文化・歴史を受け継ぎ広め、“戻りたい島”“移りたい島”を実現する』**を掲げ、現在は、総合戦略に沿ったまちづくりをおこなっています。



『渡名喜村総合戦略（平成 28 年 2 月）』の位置づけ

前頁の考え方を踏まえ、妊娠・子育て支援や子育て環境の整備、交流事業の推進などを通した「渡名喜ファン」づくり、農漁業の経営安定化支援や地域特産を活かした新産業の創業支援を通した安定した魅力ある雇用の創出、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された白砂とフクギ並木が美しい集落をはじめ、自然や歴史、文化を基調とした独自の観光産業振興といった具体的な取り組みを通して、Ｕターン者とＩターン移住者を増加させるなど、渡名喜村のまちづくりの方針に沿った施設整備をおこないます。

そして、自然や歴史、文化をはじめ、渡名喜島に眠る知られざる価値を発掘し、新たな価値づけをおこない、さらに村民や来訪者へ広く発信することで、渡名喜村のアイデンティティ形成に寄与するとともに、村民や来訪者にとって、“戻りたい島”“移りたい島”の実現に貢献することを目指します。

（３）村民説明会の実施

本事業の周知を図り、村民の本施設に対する興味・関心を喚起するため、下記の内容で村民説明会を実施しました。

①主催者

渡名喜村教育委員会　教育長　上原　雅志、係長　比嘉　朗

②参加事業者

有限会社め～ばる設計工房　仲地 政智
株式会社乃村工藝社　大谷 利幸、宮城 あずさ

③開催日時

令和元年 11 月 4 日（月）振替休日 15:00～16:00

④開催場所

渡名喜村多目的活動施設

⑤対象者

渡名喜村在住の方

⑥周知方法

住民説明会周知の方法：渡名喜村教育委員会より渡名喜村民に対し事前に説明会の開催案内文書を作成し、各戸配布をおこなうとともに、村内防災放送で数回開催を周知。

⑦出席者数

25 名

⑧概要

・渡名喜村教育委員会より、下記資料の説明を実施
　「渡名喜村歴史民俗資料館建設の基本的な考え方」A4 版
　「渡名喜村歴史民俗資料館基本構想」A4 版
・事業者より、下記資料の説明を実施
　「渡名喜村歴史民俗資料館機能強化事業」に関するご提案 A3 版

説明会の様子

⑨村民からの質疑と応答

	村民からのご意見・質問	回答
1	提案の構想が、新資料館の空間の中に納まるのか、疑問に思う。体験コーナーも設けるとなるとかなりの空間が必要になると思う。また、事業者は収蔵品を把握したうえで住民の意見を聴取してほしい。 収蔵品の中には、人骨などがある為 展示配置の工夫も必要である。今後の説明の仕方について、模型などを利用してもっとわかりやすく説明してほしい。	以前の資料が、新資料館にすべて納まるかは収蔵品をしっかり把握し、今後検討していく。また、旧資料館より新資料館の面積は大きくなっているため展示方法についても今後検討し、展示出来ない収蔵品に関しても、閲覧できる方法など工夫をしていく。
2	2020 年には、渡名喜村重要伝統的建造物群保存地区の 20 周年にあたるが、新資料館の稼働はいつ頃になるか。	現在の予定では、2022 年 4 月頃を目指している。
3	展示できない収蔵品に関しては、「ふくぎ屋」（民宿）を利用して、観光客などにみせることが出来るように解説含め展示するという工夫で、活用できないか。	テーマに沿った展示をしていく考えがある為、開館後も展示物の交換を行っていく。 また、収蔵資料の価値を考慮すると、「ふくぎ屋」（民宿）での展示は難しい。今後、資料の展示については吟味していく。
4	渡名喜村歴史民俗検討委員会作成の「渡名喜村歴史民俗資料館基本構想」の中に屋号の記載があるが、プライバシーの問題に関わるのではないか。また、検討委員会では人骨が発掘された事実を確認する必要がある。	屋号の記載部分は、「ある家」という文言に変更する。また、基本構想に関してその他にもご意見あれば申し出てほしい。
5	今回の説明会の周知について、「説明会」ということで村民への周知をされていた。「意見交換会」でない為、意見交換ができる場という認識が村民にはないと思う。その中で、村民へ承認を得ることは難しいのではないか。	本来、事業開始前に意見交換会をすべきであったが、時間がなかった為、本日、説明会という形で開催した。
6	時間のない中で、村民へ周知し、事業をすすめている状況である。村民の多くの方が説明会へ参加頂き確認しながら理解していただくことが良いと考える。	今後も説明を重ね、村民の皆様への理解を深めていきたいと考えている。
7	村内の各区域ごとに集合し、少人数での意見交換を行うと素晴らしい意見がたくさん出てくると思う。そういった下準備のあとに説明会を開催するなど意見聴取することが望ましいと思う。	本村の課題だと考える。少人数の参加者であっても今後もこうした説明会を重ねていく。 各区域ごとの集会に関しては、今後検討を進める。

２．資料館の基本的な考え方

（１）基本理念

「村民」「村出身者」「来訪者」にとっての交流拠点となる
コミュニケーション型の歴史民俗資料館

渡名喜村の歴史や文化、まちづくりの視点、村民の期待を踏まえて、本資料館では、渡名喜村の自然や歴史、文化などの価値を紹介するだけにとどまらず、次の３つの性格をもたせることで、村民や村出身者、来訪者など、渡名喜村に関わるすべての人びとが対話・交流できる資料館づくりを志向します。

①生涯学習施設として

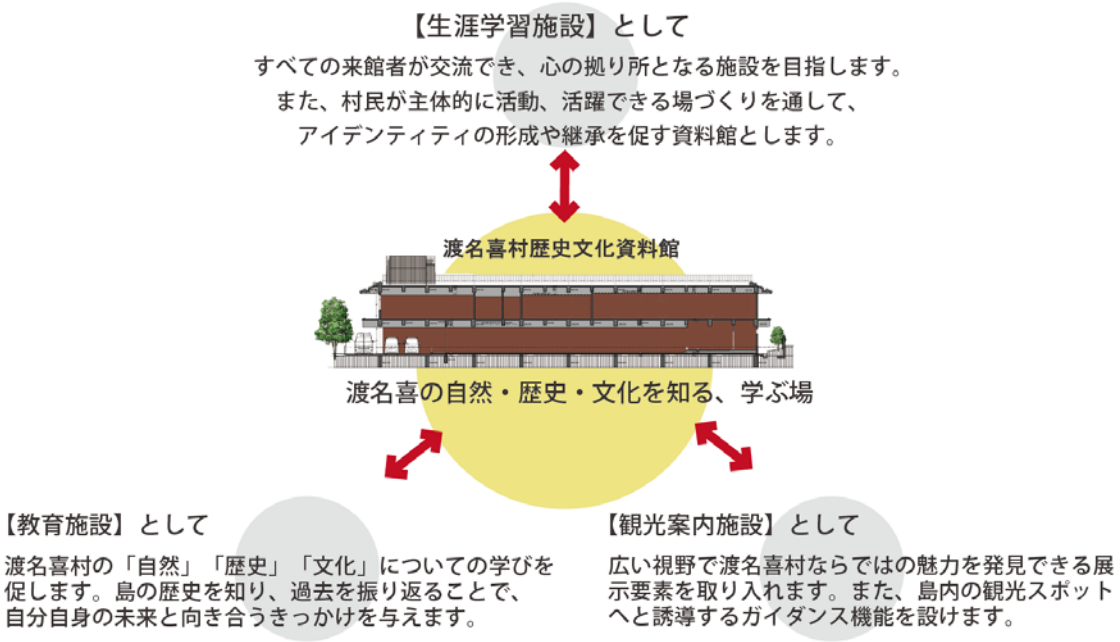
すべての来館者が交流でき、心の拠り所となる施設を目指します。また、村民が主体的に活動、活躍できる場づくりを通して、アイデンティティの形成や継承を促す資料館とします。

②教育施設として

渡名喜村の「自然」「歴史」「文化」についての学びを促します。島の歴史を知り、過去を振り返ることで、自分自身の未来と向き合うきっかけを与えます。

③観光交流施設として

広い視野で渡名喜村ならではの魅力を発見できる展示要素を取り入れます。また、島内の観光スポットへと誘導するガイダンス機能を設けます。



施設の位置づけ概念図

（２）基本方針

人と人・モノとの交流を通して、
現在・過去・未来への展望をつなげる

渡名喜島ならではの価値を基調に、他地域との文化の相互理解や交流を通して、渡名喜村のアイデンティティを体感、共有、未来への展望につなげることを本資料館の基本方針とするとともに、基本方針の実現に向けて次の３つの役割を担っていきます。

①「島」のプラットフォーム（拠り所）

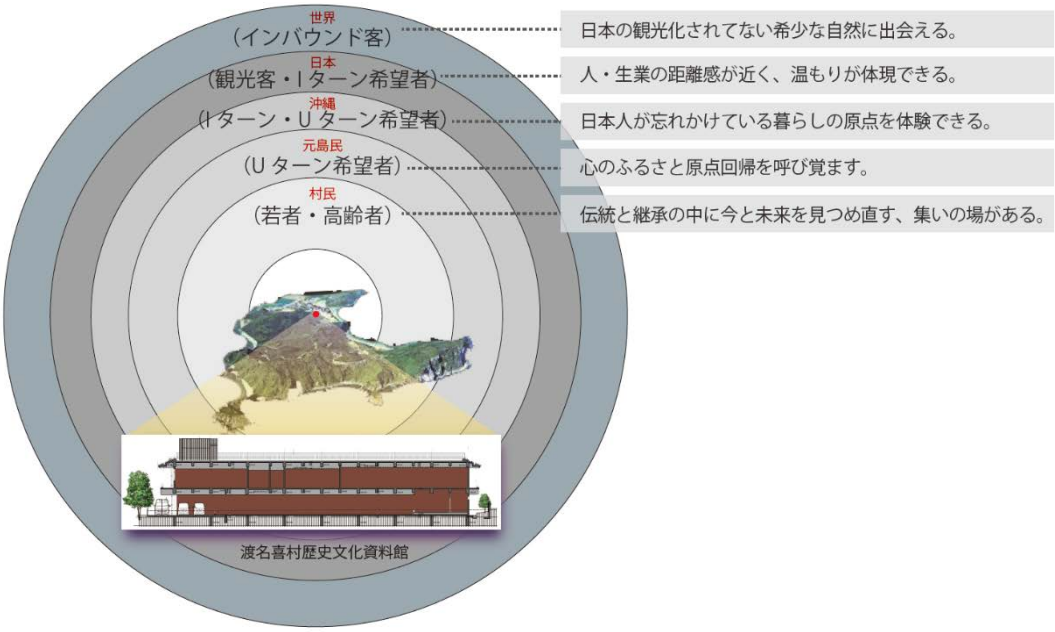
渡名喜村に立地する自然や歴史、文化、観光などに関連する資源や施設、島で行われる各種行事やイベントとそれに携わる人々など、島が有する多様な価値との連携を図ります。

②「情報」のプラットフォーム（拠り所）

教育から観光まで、島が有するさまざまな情報を、ＩＣＴを活用して収集、発信をおこなうなど、施設を核とした情報の連携を構築します。

③「心」のプラットフォーム（拠り所）

島内の場所や人、情報の連携を通じて、村民や村出身者、来訪者、老若男女など、幅広い人と人との心をつなぎます。



施設利用者別誘客の目的

第2章　展示計画

本章では、前章の基本理念等に基づき、展示のテーマや展示方針について整理していきます。

１．展示方針

世代を越えて島内外の人びとが集い、
参加・体験・交流を通じて、地域に積極的に関わる展示

展示は、世代や場所を越えて人びとが集い、参加体験を通じて地域とつながりを感じることができる場とします。「伝承・交流」を中心に据えた展示構成により、さまざまな出会いや触れ合い、体験を通して地域を**「知り」**、**「学び」**を軸に先人の知恵や伝統文化に触れる機会を提供し、その価値を**「伝える」**ことを通して、普段忘れかけてしまっている心の豊かさ、さらに“渡名喜の誇り”の醸成につなげます。

２．展示の構成

（１）展示項目とテーマ

渡名喜村の自然と暮らしとの関わりを
わかり易く理解できる展示項目

「渡名喜村歴史民俗資料館基本構想」に基づき、以下の４つのテーマで展示項目を抽出します。

①自然・環境

渡名喜の美しい空や大地、海、多様な動植物などの自然に加え、集落や神聖地といった環境について紹介します。

②伝統・文化

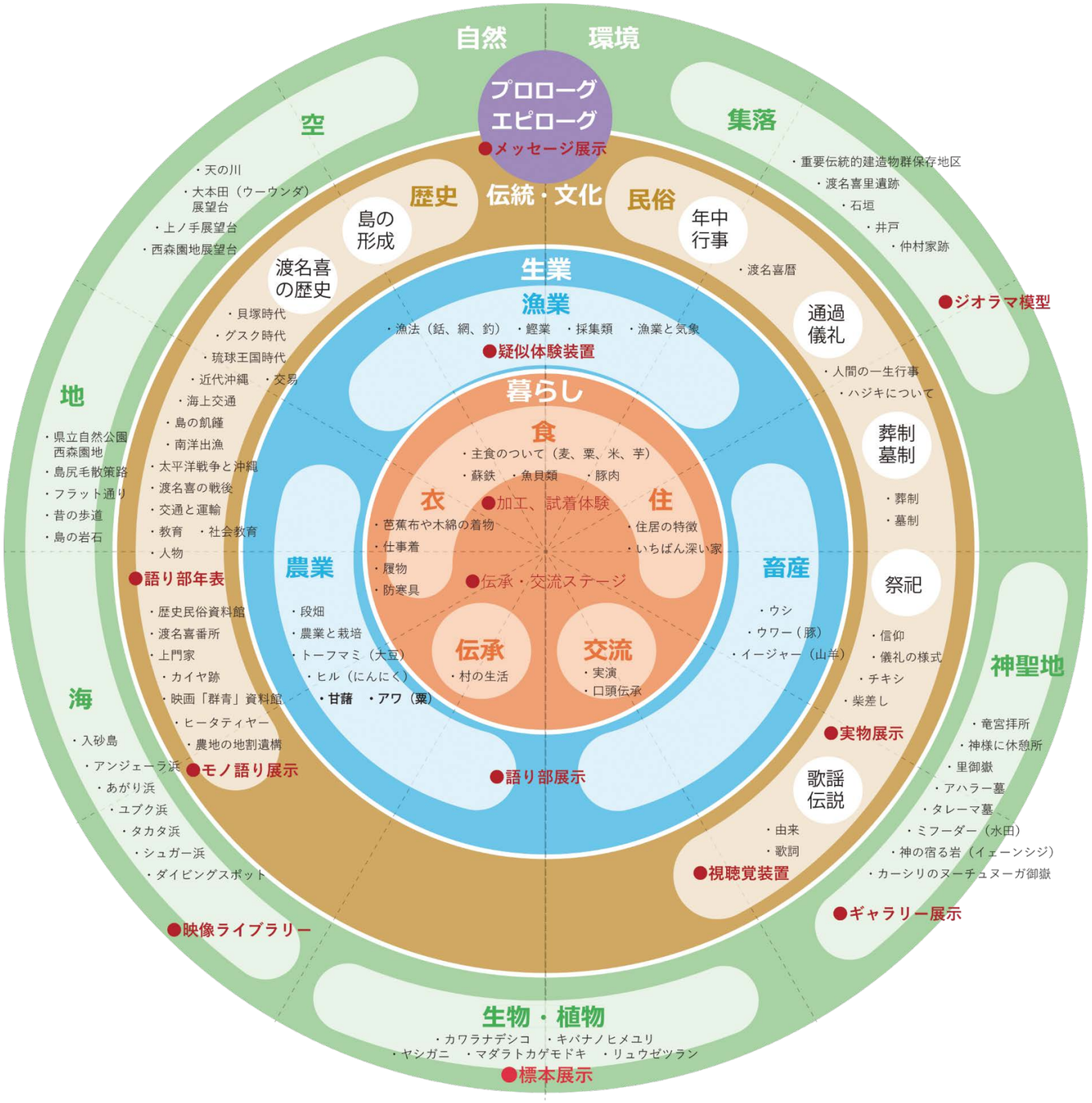
渡名喜島の誕生からはじまった渡名喜の歴史とともに、島に暮らす人びとの年中行事や通過儀礼、葬制・墓制、祭祀、歌謡・伝説といった民俗的な話題について紹介します。

③生業

島内での農業や畜産業、イカ漁やカツオ漁をはじめとする漁業など、島内における産業について、使われた道具や歴史的エピソードとともに紹介します。

④伝承・交流（暮らしや衣食住）

集落全体が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている渡名喜村の住居や衣食住の移り変わりなどの特徴を、伝承とともに紹介します。


自然
環境
プロローグ
エピローグ
●メッセージ展示
空
・天の川
・大本田（ウーウンダ）展望台
・上ノ手展望台
・西森園地展望台
集落
・重要伝統的建造物群保存地区
・渡名喜里遺跡
・石垣
・井戸
・仲村家跡
●ジオラマ模型
歴史
伝統・文化
民俗
島の形成
年中行事
・渡名喜暦
渡名喜の歴史
・貝塚時代
・グスク時代
・琉球王国時代
・近代沖縄　・交易
・海上交通
・島の飢饉
・南洋出漁
・太平洋戦争と沖縄
・渡名喜の戦後
・交通と運輸
・教育　・社会教育
・人物
●語り部年表
・歴史民俗資料館
・渡名喜番所
・上門家
・カイヤ跡
・映画「群青」資料館
・ヒータティヤー
・農地の地割遺構
●モノ語り展示
通過儀礼
・人間の一生行事
・ハジキについて
葬制墓制
・葬制
・墓制
祭祀
・信仰
・儀礼の様式
・チキシ
・柴差し
●実物展示
歌謡伝説
・由来
・歌詞
●視聴覚装置
●ギャラリー展示
神聖地
・竜宮拝所
・神様に休憩所
・里御嶽
・アハラー墓
・タレーマ墓
・ミフーダー（水田）
・神の宿る岩（イェーンシジ）
・カーシリのヌーチュヌーガ御嶽
地
・県立自然公園西森園地
・島尻毛散策路
・フラット通り
・昔の歩道
・島の岩石
海
・入砂島
・アンジェーラ浜
・あがり浜
・ユブク浜
・タカタ浜
・シュガー浜
・ダイビングスポット
●映像ライブラリー
生業
漁業
・漁法（銛、網、釣）　・鰹業　・採集類　・漁業と気象
●疑似体験装置
農業
・段畑
・農業と栽培
・トーフマミ（大豆）
・ヒル（にんにく）
・甘藷　・アワ（粟）
畜産
・ウシ
・ウワー（豚）
・イージャー（山羊）
暮らし
食
・主食のついて（麦、粟、米、芋）
・蘇鉄　・魚貝類　・豚肉
衣
●加工、試着体験
住
・芭蕉布や木綿の着物
・仕事着
・履物
・防寒具
・住居の特徴
・いちばん深い家
●伝承・交流ステージ
伝承
・村の生活
交流
・実演
・口頭伝承
●語り部展示
生物・植物
・カワラナデシコ　・キバナノヒメユリ
・ヤシガニ　・マダラトカゲモドキ　・リュウゼツラン
●標本展示

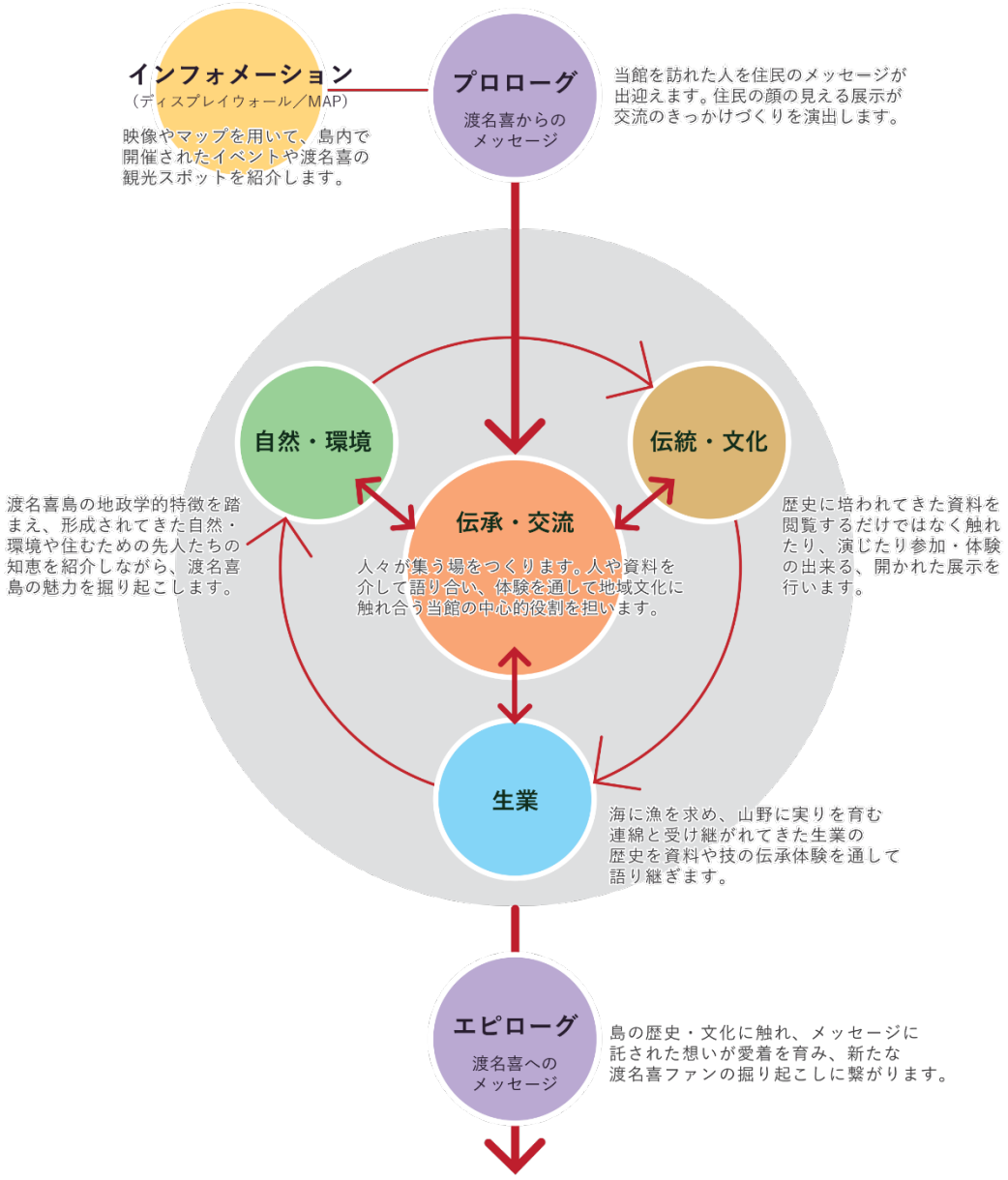
展示項目関係図

（２）展示ストーリーとゾーニング

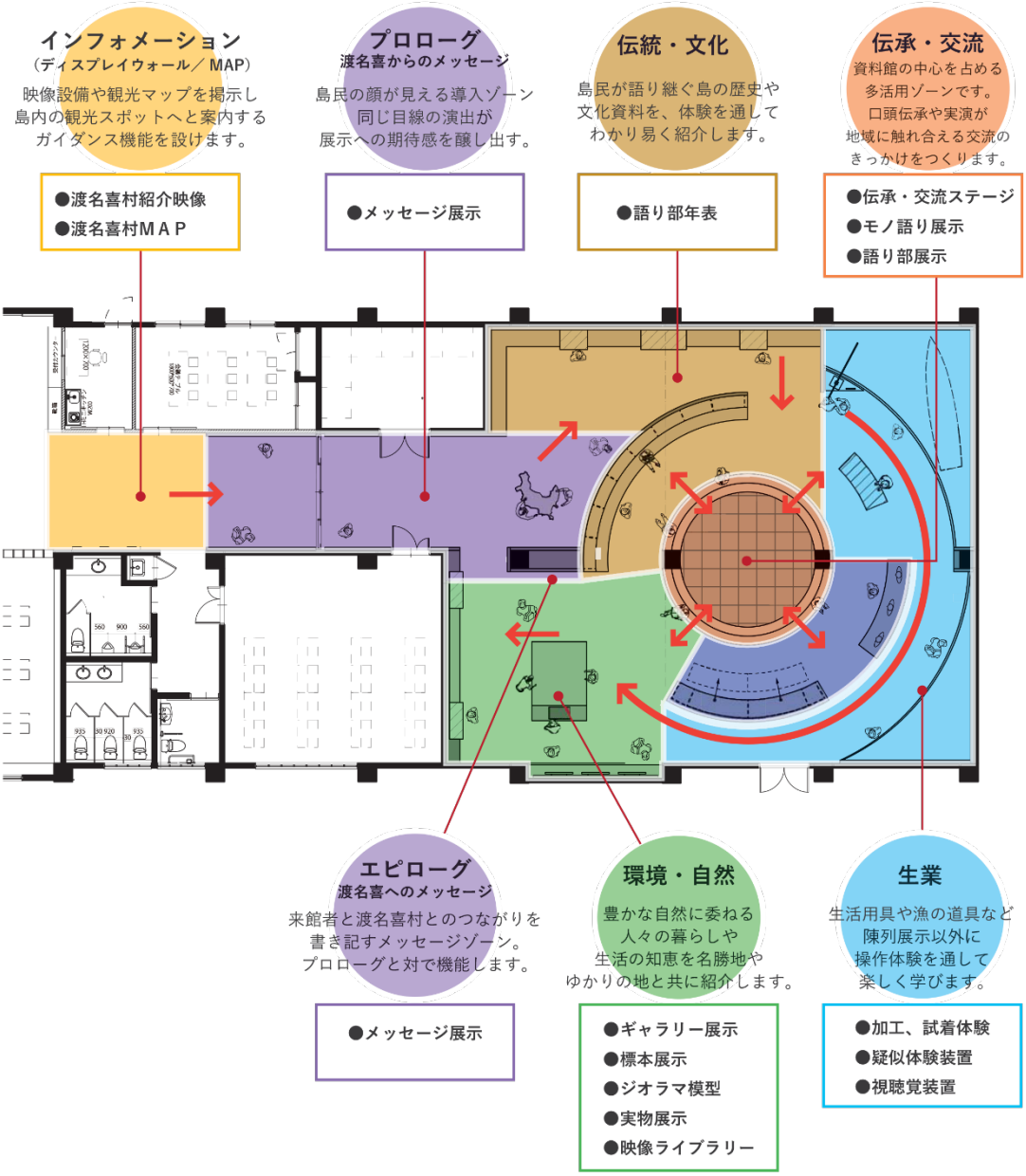
交流ゾーンを中心に、自由な視点で展示を巡れる
周遊型のフリー動線による配置

「自然・環境」「伝統・文化」「生業（なりわい）」「伝承・交流」の４テーマに、渡名喜村の地図や観光情報を提供する「インフォメーション」、渡名喜村民からのメッセージが迎える「プロローグ」、そして「エピローグ」を加えて構成します。

実演や語りなど、多目的に活用できる「伝承・交流」ゾーンを中心に、利用者の興味や関心、目的に応じてフレキシブルに展示体験ができる展示構成とします。



「知る」「学ぶ」「伝える」をテーマにした展示ストーリー


インフォメーション
（ディスプレイウォール／MAP）
映像設備や観光マップを掲示し
島内の観光スポットへと案内する
ガイダンス機能を設けます。
●渡名喜村紹介映像
●渡名喜村ＭＡＰ
プロローグ
渡名喜からのメッセージ
島民の顔が見える導入ゾーン
同じ目線の演出が
展示への期待感を醸し出す。
●メッセージ展示
伝統・文化
島民が語り継ぐ島の歴史や
文化資料を、体験を通して
わかり易く紹介します。
●語り部年表
伝承・交流
資料館の中心を占める
多活用ゾーンです。
口頭伝承や実演が
地域に触れ合える交流の
きっかけをつくります。
●伝承・交流ステージ
●モノ語り展示
●語り部展示
エピローグ
渡名喜へのメッセージ
来館者と渡名喜村とのつながりを
書き記すメッセージゾーン。
プロローグと対で機能します。
●メッセージ展示
環境・自然
豊かな自然に委ねる
人々の暮らしや
生活の知恵を名勝地や
ゆかりの地と共に紹介します。
●ギャラリー展示
●標本展示
●ジオラマ模型
●実物展示
●映像ライブラリー
生業
生活用具や漁の道具など
陳列展示以外に
操作体験を通して
楽しく学びます。
●加工、試着体験
●疑似体験装置
●視聴覚装置

展示ゾーニング